

里山と現代アート——人と自然のかかわりってなんなのか

文：伊勢武史 (京都大学フィールド科学教育研究センター准教授)
Takeshi ISE

監修：三井麻央 (岡山大学大学院社会文化科学研究科)
Mao MITSUI



1972年徳島県生まれ。高校卒業後、社会人経験を経て、米国ワイオミング大学からハーバード大学大学院に進む。専門は生態学。京都大学フィールド科学教育研究センター准教授。地球温暖化で重要な役割を果たす生態系のシミュレーションと将来予測に取り組むかわら、進化生物学の視点から人と自然のかかわりについて幅広く探究している。著書に『学んでみると生態学はおもしろい』『地球システムを科学する』(ともにペレ出版)がある。

小道の途中で足をとめる。名前も知らない小さな花が咲いている。見たことがあるような、ないような景色。こうやってのどかな里山をながめながら歩いているとき、僕はとつぜん悟りを開いたような感覚におそわれた。人は自然のなかで、「こうやって生きていけばいいんだ」と思った。自然とのかかわり方の、「ちょうどよいバランス」が直感的に分かった気がしたのだ。少しだけさだけど、自分の生き方に関する重大な疑

問の答えが、この場所・この時間に転がっていたことが不思議だ。そしてこの、里山をのんびり歩くという体験は、そこにアートを観に行くというきっかけがなければ得られなかったことかもしれない。

里山ってなに？

僕は生態学の研究をしている。生態学は生物学の一分野で、生物が環境のなかでどのように生きているかを考える学問だ。生物はそれぞれ、生きる場所の環境から影響を受けつつくらししている。それと同時に、生物は自分からまわりの環境を変えることもある。与えられた環境に合わせて生物は進化し、その反対に、生物によって環境は変化していく。こういう相互作用がどのように生じているかに興味を持っている。

生態学の視点からながめると、里山はとてもおもしろい。人と自然が相互作用しながらできた生態系だからだ。人間が自然環境を、ある程度の強度で利用するとき里山ができる。この、「ある程度の強度」というのが重要で、まったく人の手が入らなければ(強度が0ならば)そこは原生林である。逆に、人が集約的な利用を目的としてその場の生物に対して細かい管理を実行すれば(強度がMAX

ならば)、そこは「田畑」、あるいは「庭」となる。こう考えると、人間が自然を、ある程度管理し、ある程度放任するとき里山ができることになる。

人は里山の環境を変化させる一方で、里山も人のくらしを変容させる。たとえば、里山にトチノキが生えていたら栃餅を、ホオノキが生えていたら朴葉寿司をつくる、というように、伝統的な食生活や文化も里山に由来していたりする。このように、里山は人と自然のかかわりを考えるときに象徴的な場所であると思う。

里山をキーワードで表すとすれば、「共存」や「調和」といった言葉がうかぶ。ビルが林立する都会でもない、かといって畏怖するような奥山の原生林でもない。そこは人と自然が折り合いをつけながら、ある程度は人が管理し、残りは自然の自律性に任せるような場所である。もうひとつキーワードを書くならば、「持続性」ではないだろうか。自然の息の根を止めない程度に、自然が自発的に再生できる余力を残した状態で利用することが里山をかたちづくって



写真1 田んぼとため池と雑木林。典型的な里山の風景だ(撮影：筆者)

いるのである。

ちなみに「共存」とは、表現を変えると「せめぎあい」となる。人が持続的ではない利用をすると、その自然は生を失い、人工的につくられた荒地となる。逆に、人が利用の手をゆるめると自然はしたたかに失地回復をはじめ、年を経るにしたがってそこは人の立ち入りを拒む深いヤブとなるのである。このように、ある意味あやういバランスの上に成り立っているのが里山だともいえる。

なぜ自然はうつくしいのか？ ——里山の場合

里山と現代アート。実はこの、一見異質な組み合わせが注目されている。里山の環境にアート作品を置いてみたり、里山をテーマにアートを制作してみたり。そしてそれを目当てに、ふだんはのどか過ぎる里山に、どっと観光客が押し寄せたり。もっとも有名なものでは、新潟県十日町市周辺の「越後妻有大地の芸術祭」がある。このような試みについて、アートの専門家が語ることは多いが、生物学や生態学の専門家が語っているのは聞いたことがない。それならば、こんな僕にも何か言うべきことがあるのかもしれない。というわけで、私的な考察に少々おつきあい願いたい。

人が文明生活を営むうえで最も効率が良いのは都市である。なにをするにも便利、インフラを整備するのも便利。でも僕らはなぜか、都市のなかに公園をつくり、街路樹を植える。オフィスの窓辺には観葉植物を置く。こうやって文明に森の要素を取り込もうとするのはなぜだろう。人間のこの心理についてはいろんな説明があるんだけど、生物学者である僕にとっては、生物進化で説明するのがしっくりくる。極端に単純化してみると、むかし（人が「原始人」と呼ばれるほどのむかし）、森や樹木を好きだと感じた人は、森を豊かなエサ場・安全なねぐらとして活用



写真2 のどかな里山から、竹でできた巨大な構造物が姿を現した。鑑賞者はこの作品の中に入れるようになっており、竹という素材の可能性と周囲の環境との関係性を意識することとなる。ワン・ウェンチー「小豆島の光」(撮影:筆者)

し、生きのびた。一方、森を嫌いだっただ人は死に絶えた。こうして、森を愛する感情は自然淘汰で有利にはたらし、それは現代のわれわれにまで続いているのではないだろうか。このように、人の心理的傾向の根源を生物進化に求める学問が進化心理学である。

本質的に森のこと・自然のことが好きな一方で、人は他人のことが気になって仕方がない。「人は社会的な動物」といわれるように、人はだれかと一緒にいたいと思うことも、また本質的な欲求である。進化心理学でいうと、人と一緒にいたいという遺伝子を持ったグループは繁榮し、その一方で人間嫌いの遺伝子は淘汰されていったのである。人は森が好き、そして人が好き。こうやって考えると、自然のなかに人がいたり、人の活動が感じられたりする里山は、まさに人の根源的な欲求を満たす場所なんじゃないだろうか。里山は、ひと昔前の日本のありふれた景色でもあり、郷愁を誘う存在だ。その郷愁は、「日本昔ばなし」で見た記憶を超えて、僕らが「原始人」だったころのことを投影しているのかもしれない。

なぜ里山の現代アートがすてきなのか？——私的な感想

里山と現代アートのコントラスト。現代的なものや伝統的なものの対比。意図のないものと作為のあるものの対比、複雑に入り混じった色と原色の対比。いろんな対比があるから里山のアートはおもしろい。これを心地よい違和感とでも呼ぼう。最もとがってて文明の最先端をいくような現代アートが、日本全国どこにでもあってかわり映えのしない里山にあることで、あえてうまれる現象。これはなかなかくせになる。

人工的に厳密にコントロールできるものと、できないもの。この対比を際立たせ、双方のうつくしさを知るといなのが、里山と現代アートそれぞれの楽しさの奇妙な共通点だと思っている。里山の樹木だって人の影響を受けて育つけど、生き物である樹木に、厳密に葉っぱの数や枝の角度を指示することはできない。だけど、樹木が自律的につくったその造形が、実は人間に真似できないうつくしさを持っている。現代アートでも、偶然性や自律性を積極的に活用し、ハプニングを予期した作品が多い。大雑把にコントロールできる



写真3 めめめとした曲線を描く豊島美術館。自然を鑑賞する装置として究極のかたちなんじゃないかと思う(写真:鈴木研一)

けど、厳密なコントロールはできない。それを積極的に美としてとらえるのが、里山の自然でもあり、現代アートでもある。完璧に空調と照明がコントロールされた美術館に展示される古典的なアートは、庭園みたいなもの。いっぽう現代アートは、里山みたいなものである。

僕にとって、里山とアートの聖地は豊島美術館だ。ちなみに豊島というのは瀬戸内海に浮かぶ島である。だからイメージ的には「海とアートでしょ」なんて思われがちなのだが、豊島はけっこう大きな島であり、実際は海というより、里山の要素が強烈に主張している現代アートの聖地である。豊島美術館。人工的な空間であるこの作品の最重要な展示物は、ここでは周囲の自然そのものである。美術館といっても、なかにあるのは、建築と一体化し、環境の変化にゆらぎ動くひそやかな作品(内藤礼「母型」)だけ。そこはがらんとした白っぽい空間で、ぽっかりと開いた開口部から日差しが差し込み、そよ風が吹き、たまに雨が床をぬらす。そしてそこから見えるのは里山の風景。里山だから、木々は春に芽吹いたり夏に成長したり秋に紅葉した

りする。これらの自然の活動を、芸術家は予期するだけで、精密にコントロールはできない。目線と意識が流れる先は、雲が流れる空と里山の木々。吹き抜ける風。豊島美術館の人工的なコンクリートの空間にいると、開口部の先の自然のことが気になってしかたがない。美術館は額縁の効果を発揮し、里山の風景の一部を切り取って鑑賞者に提示する。ここで僕らは、あらたまったかたちで里山の自然と対峙し、たたずむ。こうやって、普段は身近すぎて意識しない里山の心地よさを実感できるのだ。自然と人間のことを考えるとき、豊島美術館が示すことが、ひとつの究極の答えなんじゃないかと直感的に思ってしまうのである。

僕ら自然科学の研究者は、里山の価値についていろいろ計測したり計算したりして、数字でまとめることで人に伝える。これがわれわれの使命だ。ところが、何を伝えるかということになると、アーティストの直感のほうが、より人々のところにぐっさりとささることも多々ある。「自然にふれあいたい」「自然を大事にしたい」と人の背中を押すのは、理屈じゃなくて感動だったりすることも

多い。こうやって、人のところに直接訴えかけるもの、「原始人」の時代から持っている人の本性に響くもの。それが里山の自然と交流するアートなんじゃないかと思う。

行ってみよう、里山と現代アート

豊島美術館のような現代アート作品は、その場所でしか鑑賞できない。古典的な名画のように、額縁のなかに収めて世界各地を興行してまわれない。こういうのをサイトスペシフィック性という。観たいなら、行くしかないのである。その作者はその場所で作品を制作し、その場所に合うよう展示している。いわばオーダーメイドだ。だから僕らはその場所まで旅行し、それを鑑賞する。その手間をかける価値はある。いやむしろ、遠くにあるからこそ意味が深くなる気もする。たとえば瀬戸内海に浮かぶ豊島に行くには、船に乗らなくちゃならない。ふだん乗りなれない船に乗ること。この体験からすでに、異世界への旅ははじまり、僕らの感覚はひらかれ、素直になってゆくのである。

里山は不便である。僕らは田舎の坂道をゆっくりと上りながらアート作品へと向かう。けっこうな距離を歩く。あるいは、たまにやってくるバスに乗るにしても、道ばたのベンチでコスモスの花なんかをぼんやり見つめながら待つことになる。でもこういうプロセスは、なぜか苦痛じゃない。そしてこの文章の冒頭のように、なんでもないものを見て、なにかじんわりと、こころにしみる発見をするのである。体験すること。旅をする特別感。日本の田舎には里山があって、そこに人と自然のかかわりがあるってことを、素直に見ることが大事なんだと思う。そしてアートを観に行くことは、いやおうなく里山を延々と歩ききかけになる。里山では、風も吹くし雨も降るし虫も出る。夕方は暗くなる。都会

では意識しづらい、こういう当たり前の自然の変化のおかげで、アート作品は表情を変え、鑑賞者のテンションを上下させる。雨が降ったときのがっかり感。雨上がりのうつくしさと高揚感。こういう正と負の両面の経験を通して自然を知ること重要だと思う。それは、美術館やテレビではわからないこと、そして科学者が示す数字でも伝わらないことであり、この大事な部分を現代アートに託したいと僕は勝手に思っている。

小豆島の三都半島でのこと。アート作品のまわりに地元のおばちゃんがテントを立て、無料でお茶やお菓子を供していた。麦茶をもらって蒸しパンを食べた。ありがとう、から会話が始まる。田舎の、親戚でもないおばちゃんと口を利くって経験、よく考えると貴重だ。お接待してくれるおばちゃん、ボランティアで作品の解説をしてくれるおばちゃん、みんな誇りとやさしさに満ちている。アートとは、田舎のおばちゃんにとっては地元の誇りである。そしてやってくる都会の若者にとっては、自分さがしなのである。そう、ひとりで旅に出て、つかれたら道端にこしかけ、草花や旅人やおばちゃんと語り合う。たまじめにセンチメンタルしていいのだ。

そりゃ問題だってある。ひこにゃんやくまモンがブレイクしてからというもの、いまや日本中の、ギリ貧の地方公共団体がゆるキャラをつかって地域おこしをがんばってるのはみんな知ってのとおり。雨後のタケノコの如しで、正直言うと僕は食傷気味である。そして今、ゆるキャラと同じような図式で、「田舎に現代アートを置いてみよう」という安易な芸術祭が日本に蔓延しはじめている。瀬戸内や越後妻有での成功例に目をつけた、役場のおじさんや商店街のおばさんたちが地域おこしのために企画する芸術祭は玉石混交だ。そして十年後には、「芸術祭」って言葉が出ただけで、「ああ、むかしそう

いうのあったね」と失笑を買う事態に陥っているかもしれない。

とりあえず僕らは、いろんなものを観る準備をしておこう。すばらしいアート作品を観たら素直に感動すればいい。が

っかりする作品にも出会うけど、それはそれで受け止めよう。ある意味、おかしなものは掘り出し物だ。見知らぬ町のゆるキャラが絶望的すぎて逆におもしろいように、アート作品をネタとして楽しむ姿勢もいいと思う。それを観るために自分が使った労力と時間が大きいほど、ネタとしてもまた、おもしろいのである。

そもそも、イケてるアートとそうでないものは紙一重だ。そこで問われるのは審美眼だ。かといって小難しく考える必要はなく、芸術祭が乱立しはじめた今こそ僕らは、ほんとにいいと思ったものを、いいと言えればいいのだ。生物学の視点で考えると、僕ら人間は、進化の過程で芸術を理解する能力を培ってきている。僕らの先祖が下した美的判断によって、彼らの生存と繁殖の成功が左右されることもあっただろう。僕らは彼らの遺伝子を受け継いで今日に至っているわけだから、自分の直感を信じてしまっかまわないと思っている。「ハズレだな」と感じたら、素直にそう受け止めればいい。よく、ハズレな芸術を観たときに「芸術は高尚でむずかしいから自分には分からない」などと自分のせいにした体で逃げる人がいるが、それは謙虚すぎるところか、その姿勢が芸術ばなれを招く気がする。芸術に詳しくなくても、好きな芸術・きれいな芸術があつてよいのである。



写真4 竹ヤブの前に立つ鉄製の造形物。鉄なのに柔らかく感じられるのはなぜだろう。でも、さわってみたらやっぱり硬かった。青木野枝「空の粒子／唐櫃」(撮影:筆者)

あとひとつ言わせていただきたい。そもそも現代アートは、安易かつ支配的な世間の思考回路に鮮烈な一撃を加えるための手段でもある。しかし巷の芸術祭ではそのパンク性は飼いならされ、「企画者と来場者を喜ばせる」という趣旨に従順な芸術家が選ばれている。芸術祭に現れてこない現代美術には、観る者を混乱させ怒らせ惑わせることで考えさせる作品も多いので、僕たち鑑賞者は(そしてもちろん企画者も)、芸術祭の作品は氷山の一角であること、光のあたらない暗黒の濁流の中に存在する生々しいアートがあることも意識したいと思う。

結語

里山の小道。陽だまりに咲いている小さな花。もしかするとその花は、人が外国から持ち込んだ外来種なのかもしれない。その陽だまりは、誰かが木を切ってきた空間なのかもしれない。いいかわるいは別として、自然と人間は、こうやってお互いに影響を与え合う(「なぜそこに咲いているか」は別として、僕はその花から感動をもらったのだ)。里山とはこういうものだ。そしてアートは、僕らと自然との接触を誘発し考える機会を与える、優れた触媒なのだと思う。